

マタイ 28:1-10 「キリストの復活」

「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。天使は婦人たちに言った。『恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。「あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる」 確かに、あなたがたに伝えました』婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、『おはよう』と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。イエスは言われた。『恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる』」

主イエスキリストの復活。それは、わたしたちの生き方を根本から変えてしまうところの出来事です。主イエスキリストの復活。この出来事が、わたしたちが何者であって、わたしたちがどのように生きるか、ということを根本から決定いたします。主イエスキリストの復活。このことが、わたしたちひとりひとりにとって、どのような意味を持ち、わたしたちひとりひとりにとって、どのような力を持っているのでしょうか。

それは第一には、死は終わりではない、ということでもあります。

死は終わりではない、ということを、主イエスキリストの復活がわたしたちに告げております。死は終わりではない。

十字架の上で息をひきとられたイエスのおからだを、弟子でありましたアリマタヤのヨセフが引き取りまして、大切にお運びし、自分の所有しておりましたところの墓の中へと収めたのでありました。それが金曜日の日没前のことです。暗い墓穴の中に、なきがらをおさめ、冷たい石の蓋でもって、墓穴を閉じました。墓穴を閉じた時が、終わりの時であり、お別れの時であり、最後の時、告別の時であったのです。墓が閉じられたことでもって、すべてが終わ

ったはずでありました。

ところが、終わりであるはずのことが、終わりとなりませんでした。むしろ、終わりであると思われていたことが、すべての新しいはじまりとなったのです。すなわち、主イエスキリストは、墓の扉をうちやぶって、復活なさいました。主イエスキリストが墓から出て来られたとき、もはや、死の力は、キリストをつかまえておくことができませんでした。キリストは、死の力をふりほどき、死の力を打ち破って、死の力を無力なものとなさいました。いまやキリストは、復活者として、とこしえの命に満ちてまいります。このキリストに対して、死の力は、もはや、二度と触れることができません。

わたしたちは、おのれの人生の旅路を進んでいる、ひとりひとりであります。わたしたちの旅路の行く末には、みんな墓がございます。ひとりの例外もなく墓穴がございます。そうして、墓穴を閉じるところの墓の扉がございます。わたしたちはみんな、そこへ向かって行こうとしているお互いであります。

そうして、わたしたちは「人間は死んだら終わりだ」ということを、昨日まで聞かされていたのであります。しかし、この復活の朝に、すべてが一変したのです。あのお方は、なきがらとなって、墓に入られた。墓穴の中におさめられた。墓の扉によって閉ざされた。だが、終わりではなかった。あのお方は、墓の戸を破って、よみがえられた。いまや、とこしえの命をもって生きたもう。そのキリストが、われわれを差し招いて、こう言われるのです。「わたしはすでに死に打ち勝った。さあ、わたしの後へついて来なさい。そうして、わたしのようになりなさい」 そうキリストは招いていたもうのです。

キリスト復活後の世界において、わたしたちの人生に対する認識は、こうであります。すなわち、わたしたちは人生の旅路を進んで行く。その途中に墓がある。しかし墓は、もはや単なる通過点にすぎない。わたしたちの人生の旅路は、墓を通り過ぎて、なお進んで行く。永遠の世界へと進んで行く。この人生の旅路の先頭を進んで行かれたキリストは、もうすでに墓を通り越して行かれたあとだ。キリストは、墓穴を抜け出られて、すでに、とこしえの命に満ちていたもう。そのようにして、大きな手を広げて、われらを招いていたもう。「大丈夫だ。恐れることはない」と、招いていたもう。

主イエスキリストの復活は、死は終わりではない、という事実を、私たちに告げております。

第二番目に、だれもキリストを閉じ込めておくことはできない、ということです。

わたしたちは、キリストを箱の中に入れて、しまっておくことができない。

すなわち、わたしたちは、わたしたち自身を主人公とするところの、この自分の人生において、あのことも、このことも、どのことも、自分の手の中に入れて、自分で手なずけて、自分の言うことをよく聞くようにさせて、自分の引き出しにしまって、自分の道具として便利に使うようにしようとするのであります。すなわち、必要なときに、必要なだけ、自分のポケットから取り出して、自分のために、使うということです。

わたしたちは、このような方式でもって、キリストをも取り扱おうといたします。このキリストというお方を、自分の手の中に入れて、自分の道具にして、自分の必要なときだけ、ポケットから取り出して、キリストを使おうとするのであります。たとえば、自分が罪を犯してしまったときに、その罪を取り消してもらうために、便利な消しゴムのようにキリストを取り出して、キリストでもって、自分の罪を帳消しにさせていただいて、そのようにして、小さな安心を得ようとするのであります。

しかし、そのようなわけには決して行きません。イエスキリストは主でありたもうからです。イエスキリストは王の王にして、主の主でありたもうからです。御使いは、からっぽの墓穴を指差して、こう言いました。「あの方は、こんな小さな穴の中にはおられない。復活なすったのだ。見てごらんなさい。いないでしょう」

だれも、どのような者も、死も、墓穴も、ヨミの力さえも、キリストをつかまえておくことはできません。キリストは王の王、主の主でありたまいます。わたしたちは、このキリストをつかまえて、自分のために使おうとすることはできません。かえって逆であります。キリストが、わたしたちをつかまえるのであります。キリストが、わたしたちをとらえるのであります。キリストがその御手のうちに、わたしたちを握り締められるのであります。キリストがそのみふところへ、わたしたちをしまわれるのであります。わたしたちがキリストを自由にするのではなく、かえって、キリストがわたしたちを自由になさるのであります。わたしたちがキリストを使うのではなくって、かえって、キリストがわた

したちをキリストのために使いなさるのです。

このようにして、わたしたちは、キリストによってとらえられてしまいます。パウロは自分のことを「キリストの囚人であるパウロ」と称しました。復活の主イエスキリストと真実に出会ったパウロは、キリストによってすっかりとらえられてしまって、もはやおのれの腹のために生きるのではなくって、ただひたすらキリストのために生きる人となってしまいました。

よみがえりの主イエスキリストは、こう言われます。「あなたのその小さな引き出し。あなたのその小さなポケットの中に、わたしをつかまえておくことなどできない。わたしは主である。だれもわたしをつかまて自由にはできない。かえって、わたしがあなたをつかまえ、わたしがあなたを自由にするのだ」

そうでありますから、復活のキリストに出会った人は、だれでも、もはや自分の主人ではなくって、キリストを主人として生きるように、変えられるのです。復活のキリストに出会うならば、そのように変えられてしまいます。

第三に、復活の命の連続性であります。復活の命は、われわれの日常生活と連続したものである、ということであります。

なんにしましても、このキリストの復活ということは、確かに、われわれの常識を超えた面、われわれの理解を絶する面、われわれの日常を超えた面というものがございます。そのような意味で、このキリストの復活を「彼岸的出来事」というふうに言う人もおります。

しかし、聖書によってわれわれが告げ知らされておりますのは、むしろ、復活の命の連続性というほうであります。すなわち、復活の命というものが、われわれの日常生活と連続したものである、という事実であります。

週の初めの日の朝、復活の出来事を知らされた婦人たちは、それを弟子たちに知らせるために、自分の道を走って行きました。その走っている行く手にイエスがお立ちになった。そうしてイエスは「おはよう」と声をおかけになった。そうしてイエスは、婦人たちと親しくお語りになったのです。

わたしたちもまた、わたしたちの人生の旅路において、この日常というものを、日常生活というものを、走っているお互いであります。そうして、復活の主イ

イエスキリストは、この日常のはるかかなたにおられるのではない。この日常が終わるところにおられるのではない。この人生の旅路の終着点の向こうにキリストがおられるというのではない。かえって、キリストは、この日常の真ん中で、わたしたちの行く手に立って、「シャローム、平安があるように！」と言って、わたしたちと出会ってくださる、わたしたちに親しくお語りくださる、わたしたちと交わりを持ってくださる、そういうイエスキリストであります。

復活の出来事を婦人たちが知らされました後、その知らせはまたたくまにイエスの弟子たちの間に広まって、大きな当惑を巻き起こしました。その当惑させられた弟子たちのうちの二人が、エマオという村に用事があって、その旅路を歩いておりました。その旅路が、彼ら弟子たち二人の日常の光景であります。二人が、あのいたく当惑させられたところの出来事について、語り合い論じ合いながら旅路を進んで行きますと、福音書記者ルカが言うておりますように、「イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた」

「イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた」 イエスが、復活者イエス御自身が、わたしたちに近づいて来て、もうわたしたちと一緒に歩き始めていたもう。それは、いつか、どこかで、ではなく、いま、ここで、もうすでに、であります。この復活者イエスは、わたしたちの日常の中に入って来られて、わたしたちの日常生活の中に入って来られて、その復活の命でもって、わたしたちの日常を、共に歩んでくださるのであります。

そういう意味において、復活の命というものは、わたしたちの日常と連続しております。福音書記者ルカがさらに報告しておりますのは、復活者イエスが弟子たちと共に食事を共にされた、ということであります。ルカ伝第 24 章 36 節以下に、このように言われております。

「こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。そこで、イエスは言われた。『なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。わたしの手や足を見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えたとおり、わたしにはそれがある』 こう言って、イエスは手と足とをお見せになった。彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、『ここに何か食べ物があるか』と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた」

イエスは焼いた魚の一切れをお食べになった。この焼いた魚の一切れ、ということの中へ、わたしたちの生活の日常性というものが、全部凝縮されております。そうして、この焼いた魚、あるいは、わたしたちの日常性というところから、けっして遠く隔たったところへイエスがおられるというのじゃない。いやむしろイエスは、この焼いた魚を、わたしたちの生活の日常性というものを、御手の中におとりになって、召し上がってくださるのです。

わたしたちは、こうして日常の生活を生きているお互いであります。この日常ということの中で、わたしたちは歩いたり、立ち止まったり、働いたり、休んだり、労苦したり、楽しんだり、食事をしたり、人の世話をしたり、腹を立てたり、悲しんだりしております。こういうことの全部を、わたしたちは、復活者キリストの御手におさげすることができる。主イエスキリストは、復活の命でもって、このわたしたちの日常の生活というものを、お受け取り下さる。そうして、その復活の命の中へと、わたしたちの生活を取り込んでくださるのであります。

これについてパウロは、こう宣言しております。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤ2:20)

主イエスキリストが復活なさった。その復活は、わたしたちの日常生活との連続性を持っております。そうでありますから、その復活の命というものが、わたしたちの日常生活の中へと逆流して入り込んで参ります。キリストがわたしたちの日常生活の中に、ご臨在くださる。キリストが、わたしたちの生きるということの真ん中へ、入って来られる。キリストが、わたしという命を、生きてくださる。このようにして、わたしたちの日常の生活が、キリストに満たされて参ります。それは、墓の彼方において、キリストの命に満たされている、というだけじゃない。墓のこなたにおいても、墓のこちらがわにおいても、いま、すでにしてもう、キリストの命でもって、わたしたちは満たされていることができるし、また、満たされているのであります。パウロが申しました。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」

まさにそれゆえに、黙示録の記者ヨハネは、イエスの招きの言葉を、このように伝えているのです。

「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしを聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」(黙示録 3:20)

いま、ここでの、わたしたちの日常の生活の瞬間、というものがございます。そうして、いま、ここでの、わたしたちの日常の瞬間というものを、わたしたちは、罪に汚染されたところの古い命でもって、生きるということが、できるのです。

しかし、復活の主イエスキリストは、わたしたちに、いま、ここで、出会ってくださる主であります。イエスは、わたしたちの心の戸口に立って、たたいていたもう。イエスは、こう言いたもうのであります。「わたしが王であり、わたしが主であり、わたしがあなたの友である。心を開いて、あなたの中に、あなたの日常の中に、いまの、ここでの、この瞬間における、あなたの生活の中に、イエスキリストを主として迎え入れなさい。そうするならば、あなたに命を与えよう」

それはすなわち、わたしたちがイエスに心の扉を開きさえするならば、イエスの復活の命が、わたしたちの中に流れ込んで来る、ということでもあります。

このようにして、主イエスキリストの復活は、わたしたちの生き方を根本から変えてしまうところの出来事であります。主イエスキリストの復活。この出来事が、わたしたちが何者であるかを決定いたします。この出来事が、わたしたちがどのように生きるかを決定いたします。

後に残されておりますのは、わたしたちが、この復活の命に対して、どのように心を開くか、ということだけであります。すなわち、「おお、主よ、どうかわたしの上にみこころがなりますように！」という信仰による従順を、わたしたちがなすことでもあります。

お祈りいたしましょう。

祈り

おお、主イエスキリスト。復活されたあなたが、わたしたちを生かす命となっ

て、わたしたちの中に入って来てくださることを、心から感謝いたします。
永遠の命が、ただ墓の彼方において、わたしたちに満ち溢れるというだけでなく、墓のこちら側においても、永遠の命が、復活の命が、わたしたちのうちに満ち溢れるのだ、ということを、心から感謝いたします。

どうかわたしたちが、いま、ここにおける、わたしたちの日常の生活の瞬間瞬間において、復活の主イエスキリストをお迎えすることができますように。王の王、主の主、わたしたちの人生のあるじとして、主イエスキリストを、お迎えすることができますように。そのようにしてする、わたしたちの歩くこと、立ち止まること、働くこと、休むこと、労苦すること、楽しむこと、食事すること、人の世話をすること、腹を立てること、悲しむこと、それらすべての中に、復活の主イエスキリストが生きてくださいますように。そのようにして、「生きているのはもう、わたしではない。キリストがわたしのうちに生きている」という感慨が、わたしたちの、いま、ここにおける感慨となることができますように、どうか、お導きください。

主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。アーメン